

# 郡山高等学校創立40周年記念式典

## 福島県高等学校長協会長祝辞

平成28年9月17日（土）13時

郡山市民文化センター 大ホール

ただいま御紹介いただきました、福島県高等学校長協会会長を務めております安積高等学校長の久保田範夫でございます。県高等学校長協会を代表いたしまして、お祝いの言葉を申し述べます。

郡山高等学校の創立40周年を心からお祝い申し上げます。

また、本日、感謝状・表彰状を受賞された皆様に、重ねてお祝い申し上げます。

さて、私は新採用の只見高校時代から現在まで、新たに赴任した学校では真っ先に校歌を覚え、歌えるように心がけてきました。それは、校歌の歌詞にその学校創立以来の精神や校訓、スピリッツが込められていることが多いからであり、また、校歌を歌うことによってその学校と生徒を好きになれるからであります。

郡山高校の校歌は、作詞が本県出身の詩人草野心平さん、團伊玖磨作曲という全国でも5校しかないというペアによって、本校創立の昭和52年度末の3月4日に制定・発表されましたが、そこには本校の校訓「創造、調和、忍耐」の3つの言葉が読み込まれています。「創造」は「新しき文化創らん」と表現され、「美しき調和に生きん」とする「調和」、そして「忍耐」は「茨の道を耐え忍び」と歌われ、いずれも「われら共々」を主体として、「いざ立ちて」の「いざ」と、「ん（む）」という助動詞が相俟って力強い意思を表しており、恐らく歌っている中に気持ちが高揚していくのではないかと思われる、素晴らしい校歌だと思います。

この校歌に鼓舞されるかのような、部活動における本校生徒の活躍については、野球部やテニス部等の運動部のみならず、近年の合唱部や放送部等の文化部においても目覚ましい活躍が目を見せます。

さて、本校が誕生した今から40年前の昭和52（1977）年はどのような年だったのでしょうか。少し振り返ってみましょう。

この年、大学入試センターが5月に発足、その2年後から共通一次テストが始まり、現在の大学入試センター試験に続いています。7月には、日本初の静止気象衛星「ひまわり」が打ち上げられ、第1回全国高等学校総合文化祭が千葉県で開催されましたが、本県でも、東日本大震災から5か月後の平成23年8月に第35回大会が開催されたことは、皆さんの記憶に残っているのではないのでしょうか。また、プロ野球の王貞治選手が756号ホームランを達成し、国民栄誉賞第1回目の受賞者になったのもこの年でした。

昭和52年4月1日、本校は、当時の郡山西工業高校の跡地で産声を上げました。ということは、当時、市内に2校あった工業高校、即ち現在あさか開成高校

が立地する桃見台にあった郡山工業高校と大槻の郡山西工業高校が統合、富久山町八山田地区内に移転・校舎が新築され、**郡山北工業高校が誕生したのも昭和52年4月1日**ですので、郡山北工業高校の40周年を祝う式典も約1か月後の10月15日に行われることになっています。

私たちの生きている時代は、もの凄いスピードで変化を続け、その流れは、ますます早くなっています。高校教育について言えば、近年の国による教育改革の動き、とりわけ大学入試改革と高校教育改革に関する動きからは目が離せない状況にあります。昨年12月21日には中央教育審議会答申が一度に3つ出されるなど、様々な提言が矢継ぎ早に出ています。現在の中学2年生が、高校2年生になった段階で「高等学校基礎学力テスト」が始まり、平成32年度高校3年生で現在の大学入試センター試験に代わる「大学入学希望者学力評価テスト」（未だに仮称ですが）を受験することになるスケジュールが想定され、**高大接続を含め、高校・大学の教育改革を一体的に進める国の教育改革の流れは、今までになく急ピッチで進んでいます。**

中央教育審議会（答申）の「はじめに」には次のような記述があります。「生産年齢人口の急減、労働生産性の低迷、グローバル化・多極化の荒波に挟まれた厳しい時代を迎えている我が国においても、世の中の流れは大人が予想するよりもはるかに早く、将来は職業の在り方も様変わりしている可能性が高い。」

このような、もの凄い早さで流れていくグローバル社会、少子高齢社会を私たちは生き抜いていかなければなりません。

本校の卒業生は13,000名余を数え、国内外の様々な分野で活躍していると伺っていますが、その先輩の方々や地域の皆さんが生徒の皆さんを見守ってくれています。何よりも面倒見のよい先生方が皆さんを導いてくれるはずです。

本校の校章は、所在地「大槻」にいわれのある槻の葉（けやきの葉）がデザインされています。欒ケヤキという木は、広葉樹の中では重硬、耐湿・耐久性に優れた最良の材として、古くから建築・家具・建具の材料として使われてきました。また、「槻」という字は、木偏と「規」から成り立っていますが、「規」は定規・規準・規範といった熟語からわかるように、「きまり、のり、手本」の意味です。このお手本という意味を持つ3枚のケヤきの葉で山を象り、中央に高校の「高」の字を配し、大きく伸びゆく郡山高校を表現しているとのことですが、生徒の皆さん、皆さんが「われら共々」つまり頼もしい仲間と共に、切磋琢磨して諸々の學を究め、他の模範となりながら真っ直ぐに、青春の夢を真っ赤に燃えあがらせて、高く大きく伸びてゆくことを私は確信しております。

最後になりますが、10年後の50周年、更にその先へ向けた、郡山高等学校の益々の発展をお祈り申し上げ、私のお祝いの言葉といたします。

本日は、40周年、誠にありがとうございます。

郡山高校校歌 草野心平作詞 團伊玖磨作曲

一 安積埜の 北は安達多良  
東には 阿武隈の脈  
群青の天に 雲沸き  
燃えあがる 青春の夢  
ああ いざ立ちて われら共々  
**新しき文化創らん**  
おお母校 おお母校  
永遠に輝け

校 訓

創 造

調 和

忍 耐

二 若き血は 身内をめぐり  
北斗星 理想は高く  
**茨の道を 耐え忍び**  
究むるは 諸々の學がく  
ああ いざ立ちて われら共々  
**美しき調和に生きん**  
おお母校 おお母校  
永遠に榮えあれ

(40年というのは、人間で言えば、「論語」の「四十にして惑わず」の「不惑」の年に当たります。一般的には、物の考え方などに迷いがないこと、人生の方向が定まって迷わなくなる年であるとされます。自分自身がどうだったかなと振り返ってみると、惑いがないどころではなく、教諭として勤務した最後の学校で、学級担任として、国語の一教師として、小学6年生を頭に3人の子どもを持つ父親として、悩み多き日々を過ごしていました。)

我々福島県の高校関係者にとっての大きなトピックスとして、本年5月26日に「福島県学校教育審議会」第1回会議が開催され、再び動き出したことを挙げなければなりません。ご承知のように、平成23年1月に「社会の変化に対応した今後の県立高等学校の在り方について」諮問がなされ、2月の第1回会議以降、大震災のため中断していました。以来、5年が経過して、生徒の減少傾向が厳しさを増す中で、適正な学校規模や統廃合、過疎・中山間地域の教育等々、重要な事柄が議論されていくことから、こちらにも注目していく必要があります。

20年後は、多くの人々が、今私たちが想像だにしない仕事に就いている可能性が高い、ということ。そこで職業人として生きるには、どのような能力が必要なのか。私は、一つ一つの個別の技術や知識などの礎・土台となるメタ能力だと思っている。この能力には、大切な3つの要素がある。

1つ目は「学び続ける力」。

世の中の変化に応じて、社会に出てからも更に学び続ける。1つのスキルが陳腐化しても、次につなげていく。例えば翻訳。今はグーグル翻訳などがあり、単に「英語を日本語に置き換える」という力だけでは十分ではなくなった。しかし、「医療分野の英語に詳し

い翻訳者」となると付加価値が高まる。学び続けて専門性を獲得し、専門性を組み合わせていくことが重要。

2つ目は「コラボレーション・リテラシー」。日本は中国や韓国のように安いものを大量生産しても価格競争には勝てない。付加価値を高めて商品を売ることが必要になる。

そのためには異なる専門性の組み合わせが不可欠。かつては同じセクションの人とだけ働くことが一般的だったが、現在は、Web 製作一つとっても、フリーランスのデザイナー・インハウス（社内）のプログラマー・設計役の Web マーケティングコンサルト、と異なる働き方をして、異なる技能を持っている人たちと、期間限定で働くのは当たり前。

強いところを残して、弱いところは外部のより専門的な会社に依頼する仕組みが当然になっていく。そうすると従来型の親会社一下請けモデルだけではなく、意見の違う人たちと対等に一緒に仕事をし、成果を出していくリテラシーが必要になってくる。価値観、文化、バックグラウンド、国籍も違うかもしれない人たちと、期限までにアウトプットを生み出していく能力。

3つ目は「問題を見つけて試行錯誤する力」。仕事でやることは20年後、100年後も「問題発見」し「問題解決」をすることです。これは不変。

この問題解決のプロセス。それは「これは課題ではないだろうか」と気付き、まだ答えがないものに仮説を立てて、プロトタイプを作り、やってみて失敗して、また試してみても答えに近づく、という単純なもの。しかしこのプロセスが非常に重要。一昔前の「正解」はグーグルに転がっているけど、未来の答えは手作りしなければならないから。

「学び続ける力」「コラボレーション・リテラシー」「問題を見つけて試行錯誤する力」——この3つの能力を下支えするには、何よりも「内発性」と「自己と他人を肯定する力」が必要。「やらされてやる」じゃなくて、「やりたいからやる」という、内から湧き出る力、これが内発性。そして、「自分には価値がある」と信じられるからこそ、試行錯誤につきものの失敗を繰り返すことを恐れない。小さな失敗くらいで、自分の価値は揺るがないから。そして、「目の前の人には、可能性がある」という他者への信頼なくして、コラボレーションはできない。

私たちの生きている時代は、もの凄いスピードで変化を続け、その流れは、ますます早くなっています。平成26年12月22日、中央教育審議会（答申）の「はじめに」に以下のような記述があります。「生産年齢人口の急減、労働生産性の低迷、グローバル化・多極化の荒波に挟まれた厳しい時代を迎えている我が国においても、世の中の流れは大人が予想するよりもはるかに早く、将来は職業の在り方も様変わりしている可能性が高い。」そしてその脚注には、「ニューヨーク市立大学大学院センター教授キャシー・デビッドソン氏の予測によれば、『2011年にアメリカの小学校に入学した子供たちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就く』とされている。」と書いてあります。

近年の国による教育改革の動き、とりわけ大学入試改革と高等学校教育改革に関する動きからは目が離せない状況にあります。昨年12月の中央教育審議会答申、それから1か月も経たない1月には「高大接続改革実行プラン」が策定され、この5月14日には「教育再生実行会議 第七次提言」が出ました。

現在の中学1年生が、高校2年生になった段階で「高等学校基礎学力テスト」が始まり、高校3年生で現在の大学入試センター試験に代わる「大学入学希望者学力評価テスト」を受験することになるスケジュールで、高大接続を含め、高校・大学の教育を一体的に進める国の教育改革の流れは、今までになく急ピッチで進んでいます。